

〔課題演習抄録〕

中学校国語科における話し合い活動充実のための手立て -生徒の話し合いの実態に着目して-

間 世 田 瑞 恵

Mizue MASEDA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：話し合い，教材開発，台本型手びき，比較・検討

1 研究の目的

21 世紀に入りグローバル化が進む中，他者との対話の中で課題を発見し解決していく力の育成が求められている。異なる文化や様々な意見をもつ人々と話し合い，課題を解決するということが必要である。しかし，生徒の実態を見てみると，意見を述べ合うことは行われやすいが，意見相互を比較したり，粘り強く相互の意見を検討したりすることが十分行われていない。綱本・若木 (2016) においても「話し合いの中で発言するということについて，自己の意見を述べるということと同義に考えている学習者が多い」と述べられている。このことから，話し合いにおける指導が国語科の授業において課題であることが分かる。国語科の授業を通して話し合いで必要な力を育成し，話し合いに活用できるようにすることが必要である。

本研究では，生徒がお互いの意見を比較・検討し整理する話し合いを体験的に理解するとともに，話し合うことの必要性を理解するための授業について教材開発も含め追求する。

2 研究の計画

研究の計画を表 1 に示す。実習校が異なるため，実態の分析は実習校ごとに行う。

表 1 研究計画

時期	研究内容
M1 前期	先行研究 現代の課題把握
後期	実態把握 (アンケート，授業観察) [授業実践 1] - 分類整理力の育成 -
M2 前期	実態把握 (アンケート，授業観察) 生徒の実態が一般化できるものであるかどうか，学校ごとの比較
後期	[授業実践 2] - 俳句の授業における話し合い

の活用 -

授業実践結果の分析・考察

3 研究の内容

(1) 能力分析について

話し合うために必要な力を，教科書分析や先行研究に基づき導出した。本稿では，国語科において「育成する力」の一覧を提示している A 社を用い，稿者が話し合いに関連するものとして再分類し整理したものを表 2 に示す。

表 2 A 社教科書分析 (話し合いに関連するもの)

育成する力	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年
表現する力	鮮やかに表現する	想像を誘うように表現する	素材を生かして表現する
議論する力	質問する	反論する	合意を形成する
整理する力	分類する	要約する	比較する
分析する力	事実と考えを区別する	論証の組み立てを捉える	論理的に読む
説明する力	順序立てて説明する	テーマを立てて説明する	目的や相手に応じて説明する
解釈する力	文脈を捉え伏線に気付く	人物像を捉える	人物どうしの関係に着目する

この分析から，学年別の教科書を分析する中で「育成する力」それぞれの段階性と，その具体を示していることが分かった。ただ，今回の分析は，一般的な内容であり，育成する段階や能力は生徒個々に異なる。学年別に分類されていても，習得している能力に合わせて指導していくことが求められる。今後は，この分析内容の再整理を行うとともに，指導の基盤ともしながら，その能力の具体的姿を記載したもの（「話し合い学習を進めるための指導内容とその具体」参照）を作成し，話し合いの指導の在り方に反映させていく。

(2) 実態分析について

では，生徒は話し合いをどのように捉えている

のだろうか。綱本・若木(2016:195)によれば、生徒には、話し合いとは自分の意見を述べるということという「発言に対する思い込み」があることが指摘されている。今回、実習先である2つの中学校で実施したアンケートと観察によって、生徒の実態を捉えた。その結果、話し合いに必要なこととして、発表することや話をまとめること等が挙げられたが、出された意見についての比較や検討を必要と捉えているという回答はなく、授業中の様子からも捉えることはできなかった。つまり、この実態は、表2に示した「比較する、分類する、質問する」が行われていないことを示している。さらに実習校(中学校1年)で分類整理力を育成するための授業を行った際、生徒から出された質問は「どうやって発表すればいいんですか?」という発言であった。こうした発言からも生徒の中でも発表することが重要視されていることが分かる。加えて、教師の中でも発表を評価の材料として重要視していたことも、生徒の実態に影響を与えているのではないかと推察される。以上のことから、生徒の中で発表するという行為自体が話し合いのゴールになってきていたこと、意見相互の比較・検討ができていない実態が導出できる。

(3)実践授業の概要と考察

①実践授業の概要

本研究では、3種類の授業を提案・実践をしたが、ここでは2つ目の授業について記していく。

今回の実践授業では、中学3年生を対象に、表2の「議論する力」のうち「質問する」に重点を置いた。お互いの意見の内容を理解するためには、「質問する」ことによって確かめたり引き出したることができることができ、不可欠だということを実感させるためである。しかし、生徒は意見を述べ合うだけになっている現状があるため、今回の実践授業では「質問する」に着目して授業を行った。

手立てとして、話し合いを行う際の司会の役割に着目し、司会に対する支援として質問の具体を記した「台本型手びき」(若木 2005)を作成した。

②考察

この実践授業の手立てによって、1つの質問に回答したことに対して「なんでそう思ったの?」と回答をさらに深める質問をしている班も存在し、話し合いが活発に進められていた。司会者以外の生徒も司会者の質問のやり方を参考に自分の言葉で質問をしている生徒も多く見られた。話し合いの充実のための手立てとして、司会者のみに配布する台本は司会者にとっても、司会者以外の生徒にとっても有効であったと考える。

4 成果と課題

(1)成果

実習校での授業実践において、司会者に「台本型手びき」を渡すことで司会者の役割である生徒の意欲の向上が見られると同時に、それ以外の生徒の話し合いに対する意欲も高まっていることが授業観察と授業後に行ったアンケートから分かった。司会者は「台本型手びき」を活用して話し合いに参加し、他の生徒は司会者である生徒をモデルに話し合いに参加していた。その結果、話し合いの際に質問する生徒が多く存在した。ここから、1人の生徒がお手本として示すことで躊躇なく質問することができることが捉えられた。

また、2つの実習校のどちらの授業も単発の授業であったため、日頃からのミニレessonを行うことは難しかった。しかし、授業を行う際に分類整理の練習や「台本型手びき」等の手立てを準備することで、お互いに質問し確かめることを積極的に行う姿を観察できた。ここから、生徒は話す内容が分かっているならば、必要な思考を話し合いの中で体験し活用することができることが分かった。生徒の力を発揮させるためには、教師の手立てを継続して行っていくことが重要である。

(2)課題

実践授業から、必要な発言内容を具体的に示すことで、無理をせず体験的に話し合いに必要な思考を習得することができることが分かった。今後は、そうした体験的に話し合いに必要な思考を習得するための教材開発を行っていく。また今回の実践授業では、「質問する」ことに着目したが、他の力においても適切な教材を開発し、意図的・継続的な学習指導を考案する必要がある。また国語科の授業で育成した力を他の教科、学級活動で活用するための手立てを考案する必要がある。

主な引用・参考文献

- 三角洋一・相澤秀夫 2016 『新編 新しい国語』 東京書籍株式会社
- 綱本佑香・若木常佳 2016 「中学生の話し合いの実践」 福岡教育大学大学院教職実践年報 第6号 pp. 191-198
- 若木常佳 2005 「話す・聞く能力を高める指導方法について - 「台本型手びき」の成果と留意点」 教育学研究紀要 51 中国四国教育学会 pp. 458-463
- 若木常佳 2011 『話す・聞く能力育成に関する国語科学習指導の研究』 風間書房